必要と男

tomer

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
必要と男

【Ｎコード】
Ｎ７２２０Ｕ

【作者名】
ｔｏｍｅｒ

【あらすじ】
男は自分を必要としてくれる人を探し、町を彷徨う。多くを失った男を最後に必要とするものとは……。

思考が輪になったみたいにグルグルと回っている。一巡、また一巡、もう何巡目なのかわからない。歩き回っている俺の靴底同様にすり減りながらも、思考は回る。

俺を必要としているのは誰だ。何十年という膨大な時間をかけて出来あがった今の俺が、誰にも必要とされないというのは、奇妙な話と思えてならない。十や、二十じゃなく何十年だ。そう、俺が出来あがるまでの時間は永かった。多くの苦労もあった。金だって随分とかかっただろう。ならば、今の俺が必要とされないのが奇妙に思えるのも道理だ。

なにも全人類に必要とされるべき、なんて言ってるわけじゃない。流石の俺もそこまで傲慢じゃない。でも、だ。こんなにも人はいるんだから、誰か俺を、俺という個人こそを必要としているに違いない。そうだろ？

たとえば、俺を歯車として必要とした奴はいた。だが、それは俺が必要なのではなく、労働力を必要としただけだ。個人を排して、等量とは言わないが誰もが持っている物を、ただそこにいたという理由だけで要求するというのは、酷く不誠実な話である。

俺も当然そんなふざけた考えには賛成できない。なにせ、それに俺が同意してしまったら、今まで積み上げた過去すべてに対しての裏切りに他ならないじゃないか。

ならば、俺を必要とする奴はどこにいるんだ？　探して探して、廻って廻って、けれども一向に見つからない。

ともすると、俺を必要とする奴なんていないのか。いやいや、こんなにも人はいるんだ。誰か一人いるのが当然というものだ。

気付けば思考はまたも一巡している。

町も一巡したらしく、いつもの公園のベンチが見えた。

だがいつもと違う事もある。ベンチには女性が座っていた。優し

げで落ち着きのある女性だ。
もしや、この女性が俺を必要とする人間なのではなかろうか。
スーツを正して、ネクタイを締め直す。自然に歩み寄って、紳士的に声をかける。
「あの、すみません」
「はい？」
女性は読んでいた本から目を上げ、私に応えた。
「あなたは、ひょっとして私を必要としているんじゃありませんか？」
「はい？」
言葉こそ変わらないが、声は不審に陰っている。
「違うというのなら、なぜ私が必要ではないか教えて貰えれば嬉しいのですが」
「あの、すみません」用事があるので――。
女性は本を閉じて、足早に去って行った。
どうやら俺を必要としているのは彼女ではなかったようだ。

真上にあったはずの太陽も次第に傾き出して、ベンチに差す木の影が傾いた。まだ今日は長い。また町を廻ろう。
そう思った矢先、ずるり、ずるり、と引きずる音が聞こえた。
「またお前か。俺はお前を必要としてないよ。いや、わざわざお前である必要がないんだ」
と俺は言い、
「そう言わないでよ。寂しいじゃない。親子でしょ？」
と、人間一人支えられそうな太くて長い縄の蛇が応えた。
「首を吊るすなら、娘じゃない縄を探すよ。それに俺はまだ、俺を必要とする奴を探してるんだ。なにより家もない。家が無ければお前を括る梁もない。なら、首の吊りようがないじゃないか」
俺は歩き出す。まだ縄の蛇が這いずる音を背に、町に入っていく。

なぜ、誰も俺を必要としないのだ。経歴でなく、資格でもなく、ただ純粋に俺という個人を必要とする奴がなぜこうも見つからないのだ。過ごしてきた人生は短いものじゃない。無価値と切り捨てられるような軽い代物じゃないはずだ。なにせ俺は、俺は、俺は――……はて、俺とは何という名前だったのか？

俺は愕然とする。震えが止まらない。無理もない。他ならぬ俺すら、俺を必要とはしていなかったのだ。これは急がなくてはいけない。すぐにでも俺を必要としている奴を見つけなくてはいけない。

変わり映えのしない町並み、雑多な人、雑多な店、雑多な、雑多な、雑多な、――あらゆる雑多をかき分けて走る。俺を必要としない雑多をかき分けて、かき分けて、走る。喘ぐように、走る。水を求める魚のように必死に進む。どっちに進めばいいのかも分からないのに、俺は走っていた。何を考えればいいのかも分からないのに、俺は考えている。

やはり、変わり映えしないのに問題があるのかもしれない。コロコロと様変わりしているのなら、いつか俺を必要としてる奴が見付かるかもしれない。

そこまで考えて、はたと気付いた。それでは見つけた途端にコロっと変わってしまうかもしれないじゃないか！　駄目だ駄目だ。それじゃあ意味がない。

ともすれば町を変えるというのはどうだろう。そろそろこの町に見切りをつけて別の町に行くのだ。

そうだ。それもいい。いや、それがいい。

なにせ別に俺が俺を必要とする奴を探すのに、この町である必要はないのだ。

そう思い始めると、猛烈に悔しくなって、今までグルグル町を廻っていたことに腹が立った。走り回った疲労が一気に押し寄せる。

今日はもう公園に帰ろう。あの公園である必要もないが、あそこには屋根もあるし木のベンチもある。

そうして別の町へいこう。きっとそこには俺を必要としてる奴が、今か今か、と待ちくたびれて、途方に暮れてるのかもしれない。きっと今日も町をぐるぐる廻って俺を探していたことだろう。
どうするべきか、もしかしたら公園に寄らずに、すぐにでも別の町へ、俺を待っている奴の元へと急ぐべきなのかもしれない。事を急ぐ必要はある。
考えがゴシャゴシャにこんがらがって、俺の足は止まる。
三叉路だ。左に行けば公園だし、右へずっと進んでいけば確か別の町に出たはずだ。

「やっと見つけた。こんなところにいたのね――――さん」

後ろから、俺を、夫でも経営者でも町の浮浪者でもない、――俺を呼ぶ声がした。
振り向けば一人の女が立っていた。
幼い外見は愛らしさを感じさせるのに、目のだけが異様に疲れている、なにかやつれた、擦り切れた印象を与える女性だ。
なぜだが俺に懐かしさを、後ろから追い立てられるような焦燥を思い出させる。
俺は、この女を知っているような気がした。町で擦れ違ったんだろうか。それとも声を掛けたことでもあったのかもしれない。いや、それ以上に何か、何かあったのか……
そうこうと考えるうちに女はこちらへと、覚束ない足取りで近づいて、トン、と俺の胸へと収まった。
不可思議な衝撃に疑問を覚えつつも、女の頭を撫でてやる。
どうしてこんな事をしようと思ったのかは、定かではないが、無性にそうしたくなったのだ。
「どうしたんですかお嬢さん。私が必要なのですか？」

女はバッと顔を上げた。驚くような、酷く悲しい様な、俺を責める顔をしていた。
よろめくように女は数歩後退って、くしゃり、と顔を歪めた。
「お――さんが悪いんだから、自分だけ楽になろうなんて、全部投げ出して、捨てて、逃げて、一人だけッ、そんな、そんなの……許せないから」
女はあっという間に駆け去ってしまった。

あの女は俺を必要としていたのではなかったのか。追いかけるべきか。
結果だけ言えば、俺には追いかける事は出来なかった。
腹から包丁の柄が生えているのだから、走るのは無理というやつだ。
とりあえず、公園に行かないと、もう別の町に行く必要はなくなった。
なにせ、俺の腹から包丁の柄が生えたのだ。探し回る必要はない。
包丁の柄なんて物はそうそう生えるものじゃない。柄が生えているのだから、刃は当然俺の腹に収まっている訳だ。
この包丁は他ならぬ、俺の腹を選んで収まっているのだ。どこの誰でも無い。ただ俺を、俺を必要としている。
もし俺がいなかったなら、この包丁はどこに収まるというのだ。誰の腹でもいいという訳じゃないはずで、なら間違いなくこの包丁は俺がいないと途方に暮れるしかない。何処にも収まっていない包丁みたいな危ない物には、誰も近寄らないだろう。
ならば良い。この包丁は紛れもなく俺を必要としている。俺はそれでいい。それだけで、もう満足なのだ。
身体を引きずって、ようやくベンチに辿り着いたと思えば先客がいた。
「今は、お前に構ってやれるほど元気じゃないんだ。それに、うん、娘のお前にだから言うんだが、やっと俺を必要としてる奴に会えた

んだ。だから首も吊らないさ。それに今は酷く休みたいんだよ」
縄の蛇は、何も言わずにベンチにとぐろを巻いている。
お前がその気ならこっちだって、もう話すこともないさ。
「あぁ、良かった。ようやく終わりだ。やっとおしまいだ」
ベンチに身体を預けて、空を見上げる。日も落ちて、降り出しそうな曇り空だ。
手を腹に当てれば、血で濡れたスーツの上に確かに柄は生えている。
良い人生だったんじゃなかろうか。色々思い出せないことも多いが、最期には俺を必要とする奴は見事、俺の腹に収まったし、一人娘の縄の蛇にも見届けて貰える。
ただ気がかりなのは、あの女だ。確か俺をなんと呼んだのだったか。
気にはなるが思い出せもしない。よもや俺の名前だったのだろうか。
思いだしたいのは山々だが、思考はついに擦り切れて、まどろむ様にぼやけ沈んでいく。
あぁ、幸せだ。俺は必要とされている。なんて事の無いただの包丁だが、こいつは間違いなく俺を、俺個人を必要としてる。浮浪者でも経営者でも、父親でも無いこの俺個人を――。
あぁなんて素晴らしいんだろう。
誰かに必要とされるのは、幸せだ。

（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

これは確か「赤い繭」のパク……オマージュ的なアレです。意味の無い意味深な話に憧れて書いたんですね。何か半端な感じになってしまった事は否めない……。

感想ご指摘批評、なんでもお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7220u/

必要と男

2011年7月9日03時10分発行